

A basic study on the involvement of design in anonymous architecture : The case of exterior design in apartment buildings

徳田, 光弘

<https://doi.org/10.15017/458542>

出版情報 : 九州芸術工科大学, 2002, 博士 (芸術工学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

終章

1. 総括

- 1-1 諸説との互換性と相違点
 - 1-2 地場型事務所における設計業務の実態
 - 1-3 地域性、市街地景観に対する意識
 - 1-4 マンション外装デザインにみる匿名建築物の実態
 - 1-5 デザイン潮流の展開
-
- ### 2. 今後の発展研究と課題

1. 総括

本研究では、「匿名的建築におけるデザインの展開に関する基礎的研究」と題し、建築デザインを社会現象のひとつと捉え、現状として建築雑誌をはじめとしたメディアによって除外される建築家及び建築物を、一つのカテゴリーとして「匿名建築」と呼び、その実態を探ることでメディアによって作り出される所謂「有名建築」との建築デザインの関係を解明していくことを論の骨子に据えた。本論では、マンション外装デザインを事例としてあげ、匿名建築家の代表例といえる地場型建築設計事務所の設計者の設計業務に関する実態を、アンケート調査及び実地調査等の分析手法を用いて解明してきた。それら諸分析によって得られた結果を以下にあげる。

1-1 諸説との互換性と相違点

第一章では、本研究との着眼点の類似性が見られたバーナード・ルドフスキーやロバート・ヴェンチャー、今和次郎らの諸説と本論との研究の相違点を検証した。また、本研究における匿名建築の研究領域の位置付けを試みた。

本稿も含めて共通することは、有名性をもつ建築家・建築物等の対立項として匿名性の強いものをあげ、所謂有名建築（家）と同等の価値を与えることでその正当性を述べる視座にあった。特に、ルドフスキーと今和次郎らと行動をともにした吉田謙吉の両論の視点に関する記述は、引用の違いこそあれ酷似したものであった。但し、ルドフスキーが文明論的な立場から未開の風土的建築・都市等を網羅的に取り上げたのに対し、今は考現学のもと文化史的・風俗史的な事象の探求にあり、両者の方向性は相違していた。

本論も、両者との共通項をもつものの、風土性ではなく寧ろ資本主義下の社会的経済性を帯びた建築物、考現学的視点の一端ではあるが対象が匿名性を持つ固有の所謂「建築家」を対象にすることで相違している。ヴェンチャーの視点は、ルドフスキーの視点を広げるもので、商業的風土に芽生える都市や建築を称揚することで、建築の領域を広げる役目を果たした。商業的風土という点から本論との観点の一致を思わせるが、本論で取り扱ったような建築物をも養護したとは誤認であり、ヴェンチャーの立てるポップ・アート等と同様にハイ・カルチャー・サイドに位置する反英雄論である。

本論で取り扱った匿名建築の領域は、言うまでもなく

ハイ・カルチャーに属さない。但し、職能としての建築家、つまり固有の特性を持つものを対象とすることから、対峙するロー・カルチャーの範疇外でもある。双方の狭間に位置することから、「ミドル・カルチャー」的な存在、両側に互換性をもつようであらざる状態に位置するようである。これは、仮説に留まるものの、本論で取り扱う匿名建築（家）の性質を再認する上で重要であり、また本論をはじめ今後の発展研究をも見据えた骨子の一部分といえる。

1-2 地場型事務所における設計業務の実態

第二章から第三章に渡っては、匿名建築家（地場型建築設計事務所）の設計活動、デザインの決定要因などについて福岡県下を対象に実態の解明を行った。

福岡県内では技術者数として10人以下の小規模に属する事務所が大半を占める。事務所の設計業務に関しては、通常平面主導型で代表者の指示下で設計活動が行われている。また、設計の際過去の作品をマニュアルとして踏襲する場合もある。建築デザインの情報入手源は建築専門雑誌に頼る部分が大いようで、大局に自らのデザイン要素として取り入れる姿勢は見せるものの、掲載された建築に関しては是非は別れ、最新デザインに対し各設計者で濾過操作を行い、自らのデザインに多少とも還元しているようである。

マンション外装デザインに関する意識調査を中心にした第三章では、より具体的な事務所の設計活動に対する実態を鮮明に捉えることができた。

全般的にコスト問題との兼ね合いがデザイン決定の主要因として大きく働いている。それは、レントابل比による主に平面計画上の拘束、施工凶段階でのVE案等による外装仕上げの制限などである。

特に外装部に関しては、外装各所の面積とデザインの相互関係が見られた。外装全体に対して面積の占める割合の高い箇所、壁面やバルコニー、屋根周り等が、タイルなどの質を下げることによって、大幅にコストダウンを図れる。つまり、コストとの関係により設計者の妥協的な姿勢の窺える箇所である。但し、壁面タイルの色彩は、ディベロッパーの指定がない限り、コストとの関連も薄く幾分選択の自由度も増す。一方、外装全体に占める割合の低い箇所、玄関周りのデザインはコストに左右されるも、ディベロッパー・消費者の関心も高く、高級感などといった漠然といった要望に伴って、設計者が積

極的な提案をできる箇所である。近年見られるバルコニーや柱頭、壁の一部等に部分的に装飾を施す手法も、面積比が小さく玄関周り同様設計者主導のデザインが可能といえる箇所である。それらは、デザインの時代的差異、所謂デザイン潮流が比較的顕著に現れる箇所とみられ、例えば古典様式を模した装飾手法（本論ではポストモダン様式としている）が浸透しやすい箇所である。

序章で述べたトップからボトムへのデザイン潮流の浸透性という観点からみると、先端的なデザインは地場型事務所へ主に建築雑誌を媒体に伝達される。また少なくとも浸透課程で3つの濾過作業が行われていること、つまりフィルターが存在が確認できた。すなわち、第一番目は建築雑誌を見る際の設計者のデザインに対する基本理念・好みなどとの合致、二番目は設計行為全般を含めたコスト問題との兼ね合いに見合うデザイン、前者とも関連がある三番目は、外装部でも面積比の小さい箇所に限定されやすいことである。ヒヤリング調査の結果によると、一番目、二番目の双方に関連がある維持管理・イニシャルコストの問題なども含まれるようである。

1-3 地域性、市街地景観に対する意識

地場型事務所の設計者にとって、地域性とは気候・風土を考慮したデザインをすることで共通の認識を得ていた。他に土地の歴史性を考慮することや、ソフト的な要素としては地域住民の意見を聞くことであるとの意見も得られた。そういった地域性について設計者の見解は、一様に設計過程で重要視すべきとのことであった。但し、実践の設計活動で地域性を加味したデザインを行うことは困難であり、客観的に見ても地域特有のデザインが非常に判別しにくい現状にある。特にマンションに關するとほぼ全国一律のデザインに落ち着く傾向にある。

マンション外装デザインに関して、比較的地域性を考慮したデザインの可能性を見いだせる箇所が壁面や屋根、色彩である。特に色彩による地域性表現は設計者間で幾分共通した手法であり、地方によっては景観を重要視し地域色を高めるために景観条例等も実施していることから、色彩に関する地域性とは景観問題とも関連した意味合いであろう。

序章で、市街地景観の主要素としてのマンションをはじめ匿名建築物について、特に市街地景観改善の糸口は、一義的な法的規制等にのみ頼るのではなく、それを作り上げる地場型事務所の景観に対する意識からアプ

ローチすることの重要性を説いた。これを受け、第三章でアンケート調査結果をもとに設計者の景観配慮に対する意識について触れた。項で指摘したように、大局的に設計者は設計において景観を配慮すべきとの見解で一致していた。設計者が都市景観形成上重要なこと、設計時の景観配慮への重要点は色彩の統一性やファサードの連続性など屋根形状や高さへの留意などであった。建築物などの統一性や連続性など、行政が実施する景観に対する見解と概ね一致する。但し、必ずしも既存の町並みとの同化といった面だけで捉えておらず、個々のマンションの質の高さにより景観は自ずから改善されるとの意見も少なからずある。

1-4 マンション外装デザインにみる匿名建築物の実態

本稿第四章では、第三章で得られた結果を踏まえ、様々なデザインの決定要因を経て最終的に決められる外装デザインの実態、時代変化を探るために実地調査を介して把握することを試みた。

分析結果より、第四章でも指摘したように、80年代中盤にマンションの外装デザインは大きな変革期を迎え、この時期に多種の装飾手法が導入されたことがわかった。すなわち、それ以前の立面的、平面的に斜線を用いるデザインなど比較的単純でコスト増加にもさほど影響しないデザイン手法から、玄関周りなどを中心とした多種の装飾手法、コスト増加が見込まれるデザインへの移行である。80年代中盤とはバブル期にあたり、好景気を背景として様々な装飾手法が浸透しやすい状態であったことが推し量れる。

但し、90年以降のバブル崩壊後も一度出現した装飾手法は容易に衰退せず、大半は継続して未だ採用されている。設計者はバブル崩壊後コストを抑えることが必須の状況下で、不必要な部分の削除、無駄を省くなど同じデザイン・装飾手法でもコスト低下を狙うことで補っていた。例えば、汚れにくい箇所、不必要な箇所のタイル仕上げを吹き付けに変更するなどである。装飾としての効果のみを狙った装飾手法（玄関周りのゲート形状など）が一部衰退を見せたのもバブル崩壊後であり、経済的不景気の中で設計者はデザイン・装飾手法に創意工夫を重ね熟練していき、装飾性みのデザインは淘汰される傾向にあった。つまり、80年代中盤がデザインの変革期に相当する一方で、90年代から設計者の装飾技法の熟練化が目立ち、いわゆる円熟期に入っていると推測できた。

1-5 デザイン潮流の展開

本論では、序章で述べた発展研究、デザイン潮流のメカニズムとしての建築雑誌などのメディアによって作られる所謂有名建築（トップ）と匿名建築（ボトム）の相互の接点及び相対関係に関しても、第三章第四章を通して解明してきた。ここで、匿名建築をボトムデザインと呼ぶのは多少差し支えはあるが、現状としてメディアの性質から自動的に発生してしまうデザインの優劣関係のみを示していることを再度留意しておく。

前述したが、デザイン潮流の在り方として、トップのデザインは主に建築雑誌を媒体としてボトムに伝達されているようであるが、その過程において多種のフィルターが存在し、幾度の濾過作業で残ったデザインのみがボトムへ浸透していく、言い換えると直接的にトップからボトムへデザイン潮流の流れがあるのではなく、浸透制限があり時にモディファイされてボトムへ流入される、という結果もそのひとつである。具体的にフィルターとは、時に各設計者が自らの設計に関する倫理観で、能動的に濾過作業を行うもの、反面コスト問題など設計者が受動的に作用を受けるものなど多種である。

また、ボトムデザインの有無について幾つかのデザイン手法がマンションの外装デザインより検出された。それは第四章で触れた、バルコニー立ち上がり上下部の水平方向（帯形状）、またマンション壁面の角部の垂直方向（コーナー強調タイプ）に吹付を施す手法などである。これらボトムデザインとは、建築家の創作意欲というより、コスト問題の制約や施工面での優位性などから捻出されて得たデザインであり、トップデザインとはややその出現過程が異なる。本論ではデザイン潮流の逆流を意味するボトムアップ構造は確認できなかったが、マンションに限らない他のボトムデザインと呼べる手法の存在の可能性を仄めかす結果となった。

最後にトップからボトムへのデザイン浸透にかかる期間について第四章の結果を踏まえて推測を試みる。80年代中盤マンション外装デザインに様々な装飾手法が出現・普及していったことは先にも述べた。特にペディメント形状やコーニス、オーダーなど古典様式を模した装飾手法、所謂ポストモダン様式が浸透したのがこの時期であった。無論、マンション外装で見られたそれは、トップのポストモダン建築と呼ばれるものより幾分異なり、デザインの流行のひとつとして単に装飾手法のひとつとして用いられる傾向にある。恐らく浸透課程におけ

る濾過作業によってモディファイされた結果と思われるが、設計者の共通の見解からもポストモダン様式の一端といえる。

マンション外装デザインで確認できた以上の現象に関して、そもそもポストモダン様式が謳われはじめたのはチャールズ・ジェンクスの1978年の著書『ポストモダニズムの建築言語』が出版された70年代あたりとあっていいだろう。また、本論でマンション外装デザインにポストモダン様式に該当すると思われるデザイン手法が出現しはじめたのが80年代中盤あたりである。双方を比較すると出現年代に10年程度の時間的差異が生じている。すなわち、マンション外装デザインに見られた以上のデザイン手法がポストモダン様式を踏襲した形で出現したと仮定すると、トップで出現したデザインは本論で対象とした匿名建築物に10年程度の時間を経て浸透しているといえる。この約10年間は、社会的にトップのデザインが受け入れられるか等を地場型事務所の設計者が慎重に吟味していることを示唆している時期とも考えられる。本論では、この考察に関して実証するだけの十分なデータを持ち合わせておらず仮説にとどまるが、今後の発展研究における重要な足がかりとなろう。

2. 今後の発展研究と課題

本論は、建築設計の匿名性に関する基礎的研究として、主にマンション外装デザインを対象に匿名建築家、匿名建築物の実態を明らかにしてきた。この研究成果は、学術的に匿名性の高い建築家、建築物を取り扱う萌芽的研究の基盤部として重要な位置を占める。序章でも触れたように本研究及びその発展研究を経ることで、建築計画上の全一的な分析、個々の研究の更なる明確化、さらに有名性と匿名性の建築の相互関係の解明が可能となるであろう。ここでは、調査等に関する今後の発展性・課題はそれに対応する各章末の小結に譲り、序章と対応した匿名性に関する研究の発展性について触れる。

本研究の発展研究を含めた目的の根幹は、序章でも述べたように、匿名建築（家）の性質・実態を解明すること、さらに所謂著名建築（家）との接点、相互の関連性をデザイン潮流という事象を介しデザイン潮流のメカニズムを探求することにあった。その点で、前述したトップからボトムへの浸透にかかる期間が約10年程ではないかという仮説は、今後実証していくべき重要課題のひ

とつである。また、トップからボトムへのデザインの浸透課程において数多くのフィルターが存在することに関しても、デザインの濾過作業上の特性についてより具体的な研究のアプローチが必要といえる。匿名建築から生まれるボトム・デザイン及びデザイン潮流におけるボトムアップ構造の有無に関しても同様に更なる調査が求められる。無論、本論で得られた結果はマンション外装デザインに限定したものであり、それが匿名建築物全てに対して立証できるか検証することも重要といえる。

他にも本論が萌芽性の強い研究であるが故に、様々な発展研究の可能性が導き出せる。序章で触れ、上記とも関連性があるモード論、メディア論、社会学的な観点と本研究との相互リンクもその一つである。建築は芸術的側面を持ち合わせているため、本研究で取り扱った芸術の一部、文化資産のひとつとして有用性を欠く匿名建築物のデザイン方法を避ける嫌いがある。学術的に匿名建築の位置付けさえ事欠いているのが現状である。本論では、それをミドル・カルチュアと位置づけた。両極であるハイ、ロー・カルチュアのいずれにも属さない宙ぶらりな存在という意味である。今後その性質をより鮮明にしていくことが必要といえる。